ミオヤの光

五香の卷

○

釋迦如來此世に出現し玉ふ本意は、一切衆生の爲めに心靈界の太陽なる、永遠不滅の無量光如來の本願力を敎へて、衆生の心靈を復活し、現在を通じて永遠光明の人と爲さしむるにあり

願くは我同胞衆よ、受けかたき人身を受け値ひかたき佛法に遇ひたり幸に、如來大悲の本願を信じ光明の生活に入り意義ある人生前途に光明を認めつゝ向上の一路に共に〳〵進まんところの、此會に入り共に無上の法味を味はひ、互に相勸め相扶けて善道に進まんことを望み普く世の有緣に勸むるものなり

大正四年五月　　佛陀禪那辨榮

○

宣傳師は從來の如く僧に限らず何人にても、全く分に光明獲得したる者は他に宣傳する資格あるものとす

故に此光明に依て復活し、如來の慈悲に動かされて自己の信仰を他人に頒布せざる

を得ぬに至は皆資格あるものなり

如來を離れて自己の力にては信仰も宣傳も得らるゝものにあらず

汝等一に如來の聖意と御力とを仰ぎて奉仕せらるゝ力を得る樣に祈らるべし

○

欽復　御照會の入山修道の事に付ては、是はと申すことも無之候

蓋は廿三四の頃と覺へ候、其入山修道せんとの動機は其頃東京にて華嚴五敎章の講義を聞て、敎相文字上の事はわかりても佛敎の眞理は三昧に入て神を凝すにあらざるよりは證入すること能はず、依て暫らく山に入れり、常陸國筑波山麓より一里半ばかりか、山頂より二丁許南の方に立身石てふ巖崛あり、此に在て凡そ一ヶ月、次に場所をかへて一ヶ月、身に纏ふ處は半素絹食物は米麥そは粉などにて、大きな山なれども夜分は山中一人にてまことに靜閑にて三味を修行するには最も適當と存候、しかしながら入山修道の要は形よりは精神上の要意が肝要に候

何れまた詳細は後便に　匆々

明治四十二年三月三日　　巡敎先にて

○

……受かたき人身、遇がたき正法に、また發しがたき道心實に萬劫難遇の好時機を徒らに過し空しく費しなば老てのちいかに悔ゆとも及びがたく、殊に我日本は維新已來物質の方面に一時に長足の進歩は爲め今日までは一般の人民精神の方面には未だ曾て及ぼさざりき、漸く近年始めて民心覺醒して宗敎及び家庭の方面に注意する傾向を起し來れり、故に到る處に於て青年の爲めに光明の傳道は歡迎せられ候、殊に關東は布播せしこと少なきものなれば將來時機に應じて理想の宗敎を宣傳するは關西よりは寧ろ關東に望みを屬すべき哉と思はれ候、そこで貴氏折角の好因緣の熟せる處いまより勇み進みて、進趣して、如來大光明の中に入り自ら光明界中の人と更生し、而して後世の闇黑のなかにさよへまる衆生を誘導して光明の中に轉せしめんように、如來の大本願力に乘しなされよ、死してのち初めて淨土なるにあらず、現在にまた光明の新天地に出る能はずして六道の街に彳みて煩悶する處の精神を轉して、心機一轉

如來の大光明中に闖入する時に於て淨土の人と成ることを得べし……

○

朝日に匂ふさくら花を、大みおやの御惠によりてあらはれし色とおもへば咲く花をながむるにも、御慈悲のほどぞ感じらるれ、若し一たび　大みをやの光に接し光明中の人と化するときは觸目、物として佛の御惠みにあらざるはなしと觀せられむ……

中略……將來の宗敎家の事業は自分が理想せしやうにせざればならぬことゝ存候、貴氏が現在の宗敎家が只虛榮に流れ營利に汲々として眞實救世の實を擧げざる俗流と共に流れざるように意を用ゆることはよし　然れども進んで如來の光明を以て世の爲め人の爲め、身を犧牲にして仕へんとの志はなかるべからず、一たび閑靜に入て精神を鍛練するは已に釋尊の芳躅たり、光明を得て而して後に光明的活動すべきはまた釋尊の範を垂れ玉ふところなり……中略……大みをやは將來宗敎家に對していかにして働かせ玉ふ哉は、眞實心に信する人に啓示し玉ふべく候、將來に於て宗敎家はます〳〵必要なり、時代に適したる宗敎は必ず行はれん、むかし我宗祖大師黑谷に隱遁し玉ふ時の叡山の僧徒の虛勢いかなりしぞ、いかに盛なりしも實なし、我宗祖の素朴黑衣にねづみの大衆衣を身にまとひ金剛ざうりにて歩行せられし大師の意志は數百年の後にも尙行はれつゝあり、然れども眞實世を救ふの一心なく只虛榮を樂とし明照大師の號を引擔きまはりて御祭り主義は遂つて財産家の息が伎者をあげて一時の榮花の夢に、祖先傳來の産を蕩盡すると恰も類似の點なきにあらざるべし、七重八重花はあれども山吹の實の一たになきぞかなしきとは古人の歌、眞實實のある宗敎こそ眞實に世を救ふなれ

○

御書翰によれば先頃來病魔に襲はるゝ處となりしとは、嗚呼八苦充滿の世なるかな、隆子よ、はやく未だ命魂死魔のために奪略せられざるに先だちて、南無の一念に業障深重なる命を投じて、無量光壽の如來中に復活せられよ、其精神にして已に光明界中の人とならば此四大の假合物任汝業に隨ふて何の慮りかあらむ、此四大和合の依身終て初めて是淨土の人たるにあらず、已に一念如來心海に歸しぬれば精神上に是淨土の

人たるなり、已に淨土の人とならば已に生死を超絕したるなり、超絕生死の分に候、無常の風いかんともすることなし

只なむあみだ佛の外に要あるなし

○

……さて何は兎もあれ先第一、に念佛三昧の修行最も急務にて候、無常迅速念々に時光遷流して須臾も止まることなし若し一日空しく過さばまた再び逢ひがたし、念佛三昧とは口に專ら佛を稱へ意に一ら佛を念じ念々常に彌陀を忘れず、彌陀は本より已來常に衆生の前に在せり自ら未だ心眼開けずして之を觀ること能はざるなり、衆生心水澄む時、如來の靈月永しへに感應せん

愚衲昔し廿三四歳許の時に一ら念佛三昧を修しぬ、身は忙はしく事に從ふも意は暫くも彌陀を捨てず、道歩めども道あることを覺へず路傍に人あれども人あるを知らず、三千界中唯心眼の前に佛あるのみ、一ら佛の相好を憶念し奉らんとするもろもろの妄想現前して或時は煩悶に耐へざるあり、然れども久うしてついに妄想現を苦とするに足らざるに至りぬ、寤寐に只佛の相好を觀じて捨てざるに或は定中に妙相現するあり或時は佛の相好なく只黑き相と見るあり正念と妄念との鬪爭隨分奮戰しは〳〵なり、何れにしてもいか成處までも精神の修行敢爲にあらざれは成し難し、むかし宗敎家の大偉人たちに於ても悉く困苦を窮めたるは、身體の苦行よりは寧ろ精神に於て眞理の光明を發見せむとの爲に摧勵したる苦は深かりしならむ、一心に專ら念佛三昧によりて活る眞門に入るべし、是儞が一大事の務なり、

時　梅雨にあり道のため　體を自愛せられたし殊に病後なれば特に自重せられんことを、　匆々不具

六月二十九日

○

此念珠は　如來光明主義の會員の必携すべきもの、此一連に宗敎の要を示せり略解を讀てしばらく意を傾し玉へ

若し　大みをやより御引あげの急なるあらば潔よく命を奉じて御許に詣でゝ、また

再び請願して此有緣の國に遂來して此光明主義を宣傳して闇黑裡の人々をすくへよ

尙中述度事は後便に讓り候　光陰の鬼に迫まられて縷々するのいとまなく候

四月二十七日

○彌陀の實體と化用

彌陀の實體

絕對の大靈（眞如）　形而上實體論の要求

彌陀の化用

宇宙最尊の彌陀　形而上有神論の要求

三味對象の彌陀　實驗宗敎心の要求

贖罪的の彌陀　救濟的宗敎心の要求

傳承的の彌陀　傳來歷史の要求

神話の彌陀　幼稚な宗敎心の要求

○

此ころいかゝ候哉

申述度こと多々なれどもいつでもせはしなくて其意を得ず候

只、大みおやの御いつくしみを念じて光明の中に生活せるれんことのみぞ祈候

餘は兎にも角にも、

○

古人曰、池を穿て月を待たず、池成れば月自ら來る、と實に彌陀身心遍法界なれば

行者の心想たに淳熟すれば彌陀の靈月は常に宿らむ、何の疑ひかあらむ

只須らく三味に住すべし、行住坐臥に　如來を憶念すべし

右習志野の草庵の行人衆に告ぐ

明治四十四年九月十日　府下岩淵正光寺にて

○

本願力、先づ本願の意は　大ミオヤが一切の子等に對する願望である、世間でも親

が子に對する望は子をして親自己と同一の位置に到らしめんとす、而して自己の志を紹しめ第二の自己たらしめんとするにあり、大ミオヤも亦然り一切衆生をして作佛せしめて圓滿至善ならしむるにあり、力とは、如來の一大靈力、一切の子らを解脫靈化せしめて圓滿に養ふ力なり、此力法界に周遍す此力太陽の光化熱の三線を以て地上の萬物に及ぼす如く、智惠と慈光と靈化の三能を以て衆生界の心靈を開悟與樂靈化するの能あり

如來の一大能力を以て萬物に及す二面あり、一方には大靈より萬物を發現能生養育する力となる、是天地萬物に及ぼす能力である、他面には天則秩序の下に一切萬物を進化せしめて人類の精神となる時は心靈を開發解脫して靈界、即ち涅槃に攝取する靈力あり、本願力とは自然界の生物を靈界に攝取する力を云ふ

大靈は右の手を以て蒔きたる種を左の手を以て攝取するなり、天則秩序の中に因果の法則と爲りて萬物を能生能養するは其目的は高等なる靈的生命として永遠に歸趣せしむるを目的とす、目的が卽ち本願なり、其本願を示す爲に往昔法藏比丘と顯はれ十劫正覺と現しまた三世諸佛となりて世に出現す、歸する處は大靈の目的なる本願力の出現に外ならず。

○

如來本願力は常恒に十方に徧在す、然るに衆生何にして此靈的光明に攝取せらるべき、是衆生心が　如來の本願力に契合して攝取同化する、是ぞ　大ミオヤが法藏と示現して本願四十八の中、十方衆生至心信樂欲生の三心なり

三心の內、至心（信……智力／樂……感情／欲……意志）

此三心が　如來の大靈力と目的の靈力と契合する心能なり

至心は形式にして信樂欲は內容動機なり、能く〳〵研究すべし

○

斯敎の立方とて昔の聖道家の此土入聖とは大に其趣を異にす、先づ斯うである

宇宙全體悉く、如來大光明中ならざるはない、其大光明中に有つて其中に自から二面ある、宇宙は一面よりは自然界他面は心靈界、前者を娑婆と曰ひ後者を淨土と名づく、娑婆本より大光明中である、具存とは娑婆にも淨土にも　如來の身心充滿せぬ處なきを云ふ

○

光明照さぬ處なく　如來を離れて娑婆の實體はない、然して衆生も本、如來の子である故佛性具て居る、而して本願の光明に攝取せられ同化せらる　時は身は娑婆に在て神は光明中の生活である、然れども身は自然に縛せられて娑婆に在るる理想だけに光明中の人淨土にすみあそぶ想あり、然して彌々命終の時は今まで理想と觀じて在つた光明界が今度は實現と成るのである、であるからかたちから見れば娑婆と淨土と異なれども精神から見れば何れも同じ、如來大光明中である、大光明中に在りながら肉眼は娑婆を見て居る、宇宙同一の　如來中にて娑婆と淨土との實體はかはりはないのである、これが圓具敎と云ふのである、そしてそれは法界の眞實義なのである。善導大師、元祖大師もそれは確かに認めて居つたのである、されども衆生がわからぬ故に方便して宇宙が全く二つあるように敎へたのである

此土入聖とはわけがちがふ、一切處　如來光明中であるから現在から光明中の生活に成るのが圓具敎である。さればとて全く無比莊嚴の淨土無しと云ふではない、全く有るけれども十方に徧在して、如來心と相應すれは經驗できる、たとひ實驗できぬとも大光明中の生活にはなれる

次に眞宗の信心歡喜乃至一念至心廻向即得往生住不退轉、と、眞宗で云ふ信心獲れば此身此まゝ即得往生と、これ矢張り圓具敎の一分である、死なねば往生できぬと云のは超然主義である、また圓具敎にては現在ながら光明生活にて、眞實莊嚴の淨土往生は身の死後である、

光明名號經に彌陀は本有法身常住無量壽佛、斯土の衆生に方便法身を現して本覺の淨土に攝取する事前と後とあり、法藏因位の十劫正覺より無量光に攝するは　舊　約にて、釋迦を通して無量光に攝するは新約である、舊約は西洋の猶太敎と同じく淨土は

全く死後の別天地とす、新約は精神的に現在より光明中の生活に入ることができる、十二光の中初三光は　如來なる眞如の體相用三大にて法界に徧在せる大靈の體と大智惠と大靈力とである、

○

暑に入り大に熱さを感じ候、何れ久しく　本尊樣にも御無禮候間本年八月は拜しに歸省候

山口サンには定めて邊土にて御不自由ならんことなれともむかし釋尊の入山の例に倣ひて辛抱なされんことを望候、おもふに何れの地にても宗敎上精神上の新舊の過度未だ判然せぬ爲に岐路に迷ふて居る輩が多く候、

現在を通して永遠の光明主義、死を豫期しての念佛にあらずして靈に生きん爲めの念佛、

本より宇宙本體は絕對である、衆生業識より認むれば人間は人間丈に、犬は犬虫は虫だけに世界を感じて居る、如來は佛智を以て法界を悉く淨佛國と觀じ玉ふ、大經の末の佛智を信ずる人は化生し罪福因果を信ずるも未だ佛智を信ぜざる人は胎生すと、此文に深く味ふ處あり云々

大正七年七月二十三日　　名古屋愛知町牧野願王寺ニテ

○

……何は兎まれ人生の一大事は、大みおやの恩寵を被むりて靈を養はるゝ處にあり候、念佛は死ぬ爲めではなく生くる爲めにて候、生くるとは生るゝ事、生るゝとは人々本具の靈性が、無量光如來の靈光に觸れて發生することにて候、鷄卵が雌鷄の懷にあたゝめられたるために孵化する事に候、產たての卵の中の生命はまた活動せざるものに候へども雛となれば活きて來たものにて候故に、死ぬ爲めではなく活くる爲めと申す事にて候。云々

十二日　　大津市念佛寺にて

○

凡そ有想有念を以て涅槃を障ふるものとし、淨土晨鐘了俗九(二十一)に錢孝

直先生が我念臨行時有甚麽放他不下處若說世間放不下正恐跳他不出未免再來還要戀他則甚若說此身放不下正恐掙他不脫未免再受還要痛他則甚若說此心放不下正恐斷他不盡留爲種子還要惜他則甚若說佛法放不下正恐灑他不開執成法縛還要愛他則甚若慮悲根萬一迷失則擺所認慧根正是命根正是八識其怕迷失一念正是執我七識分別六識正須擺落淨盡還要護念他則甚至於淸淨本然元明妙覺不容揀擇無可任持直至一切不見一法不存方得全現儞向日迷來帶了如許種々的來今日悟去還擬將了那一件去乎

と云へるに對する御返書

日外之書中錢孝直とやら臨行の時甚麽放他不下の處か有る云々、禪道の符號は唐人の寢言で陣ブン漢ブンだけれともつまりかうだらう、身にも心にも佛法にも縛りつけられては終に盡未來際成佛出來ぬ、取もなければ捨るもない本來淸淨の佛であるから元明妙覺なり其外に揀擇すべからず敢て任持すべきものもない、一切うちすてゝ一法も存せざるに至らは本來の佛が現前す、本來佛であるから何にも引つけさへせざればよいものである、引つけるから自縛て佛になれぬのであるとの謂ならん

辨榮のは前と正反對である、無想無念でなく無執無縛でなく想て想ふて想ふ寸間もはなさず、即ち彌陀を想ふて捨てぬのである、無念でなく念々彌陀を念じて暫らくも離さず無執でなく執持名號執持して常に離れず無縛でなく我と彌陀と縛つけて少しも離れぬのである、彌陀に縛られて何處へ行かうとしても行くこと能はず彌陀に縛られて居る身のつらさは寒中の寒さ凌ぎに無間地獄の温な處へも行く事出來ず炎暑の折からも寒地獄へ行て見ることも出きず行住坐臥彌陀に縛られて寢るも起るも心に縛り付けられたる彌陀は離すこと能はざれば止なく彌陀と共に寢ね共に起き、彌陀に縛り付られたる身の不幸一生離るゝこと能はざるのみか此身はほとけて離されること即ち放免の期限はあるなれども心は彌陀に縛られていやな極樂へ拘引されて往かざる を得ず、それても習慣と云ふものは妙なもので彌陀に縛り付られて晝夜に離されぬ身と成つてもそれか常と成てしまへば左のみ苦にもならぬことよ、彌陀と縛りつけたる我心始は自分が彌陀を負ふて居る樣に抱いて居る樣な氣がしたけれとも實は彌陀に負はれ

て居たのじや、抱れて居るのじや、自分の樣な横着な奴には持て來いである、何處へ行くにも彌陀に負はれて行くのだから樂なものである抱かれて居るので在るから氣樂なものじや

昔は辨榮も禪宗流に獨身生活ほと氣樂なものはない彌陀とのくされ緣を切て仕舞たならさぞかしサッパリしてよいと思ふたこともあつたが今日に爲て見ると 左樣でない、何程の大儀な事でも彌陀の力でやつて呉れる、苦があれば慰めて呉れる寢かして呉れる負つて呉れる樂な事よ、何事でも皆其力でやつてもらふた方が實に樂である、矢張り彌陀と同穀的に家庭を造る精神生活の方が得策である、而し

お前百まで私しや九十九まで　共に白髮のはへるまで

ではない

お前無量壽で私無量壽　いつも白髮ははへはせぬ

と云ふ文句で、偕老同穴の契ではない攝取同化の無上覺となるのである

其後云何哉、光陰疾過く只慽らくは自信敎人信の傳道のすゝまざることを

何は兎まれ、如來の光明宣傳是我生命、時敎相應を要す、世は既に開けたり佛敎の新傳道現代敎育と聯絡の出來る宣傳を以て闇に迷ふ人々を敎化いたし度候

宗敎は人の精神を眞善微妙に爲しむるにあり、極樂は是其極致、若し彌陀の光朋によらざれば能する所にあらず、處々にて講演せる筋書あり參考の爲めに送り申候

ミナニよろしく

本月中朝鮮　來月九州　十月は京都附近に定まり候

大正六年八月二十日　　朝鮮平壤華頂寺にて

○

先日は折角御出之砌不在にて御氣之毒に存候

七日晩漸く歸京候

來月一日より七日間知恩院にて念佛三昧其準備にて忙數候

起てよ〳〵との

如來の勅命の聲いかに聞ゆるや

――――問

如來の慈光と云物の其實在を認め得らるゝや

如來の光明と衆生の心との區別と關係とが確乎とわかる哉、此と同樣な事に就て法然上人と叡空上人との爭が有たらう、戒法の事に就て空師は心法戒體と云て戒の體は人の心に屬して居るものであると、然師は然らず戒體は色法であると其故は天台大師は戒體は無作の假色即ち起さずんば止なん性無作の假色であると

此義能〻會解しうるや

若し戒體が全く心法なれば心が本戒であるから誓て受ずとも自分で行はるる筈である、然るに作法を待つて實際に發得すれば初めて戒體が働ける樣になる、發得すれば心の中に本尊と成て自己の勝手の心意を制裁するものであと意が物を殺さんと衝動すると其奥の方から之を制裁する力が突然と動き出す、朝寢して居ると胸中に伏在ず戒の力が己を刺働して覺醒せしめて起きよ〳〵と囁く、心中に安置しておくけれども心其物ではない、故に無作の假色と云ふ

念佛もまた然り我心を離れては我が爲には佛の光明また恩寵が感じられぬ、然れば是心作佛是心是佛、本來の心其儘が佛なるか、否ナ然らず一心に佛を念ずるが故に佛光我心に加はる故に我心佛と作る如來の恩寵全く我全體に入る爾時に我なくなりて只佛心のみになる、今物理上の例を以て云はゞ吾人の心は闇黑な而して冷たい切炭である、此黑其まゝが火ではない若し此炭に火が燃へつく時は炭が忽ち變じて眞赤にまた暖熱になる此炭を離れて火を認むること能はず炭全體が火來と化す、然れども炭、火にあらず火もまた炭に非らず而して炭が火と爲り火が炭になる如く炭を離れて純火を認むること能はず、爾の如く人の心を離れて如來の慈光を認むること能はず然れども心本光明に非らず

たとひ世界に一點も火が發現してあらざるも火の大なしと云ふべからず、如來の光明もまた然りたとひ世界中に一人たりとも如來の心光に觸れて居る物なきと云ふも本々如來の心光法界に充滿せるの眞理たるを否定する能はざるべし、火大法界に周徧し

緣に隨ひ業に循ひて發現す、如來の光明もまた然り、思ふて知るべき

○

光明主義は到る處に行はれ候

愚衲は廣く及ぼさゞればならぬ故に御身等は地方に於て一日もむだに時間を費さぬやうにして

大みおやの御むねを世の人々に知らしめて光明の中に生活すべきやうにすゝめられたし

开は自己の力の及ばざる處なれば常に、如來の御力を仰きて一心に御たのみすれば必らず大みおやは大なる加被力を加へ玉ふこと疑なし　云々

○

是からの集りには昔流の十夜抔の樣な形式を廢して只能所一樣に讃歌を唱へ聖經を讀み夫から共に法味を頒つ樣にして勤むるやうに致し度候

從來の形式的法會には重きを於て勤むるにも及ばず候　其かはり內容を養ふべき眞面目なる集りを催すことに致すべく候

辨榮は當時では他に出ても從來の十夜抔は避ける事にいたしてをり候、であるから……そは習慣であるから皆のよろしいやうにつとむる事にして呉れ度候

貴坊にても定めて困る事とは存じ候へども人は困難を何度も〳〵通過して初めて如何なる事も困難を感ぜざる樣になる、であるから一つ奮發して勤めて欲しい

平素出來る限り生命ある信者を作る樣にして呉れられ度候

種々申述度事候へども面談に讓り候

二十一日夜

○

十七日夜門司乘船朝鮮に渡り候、朝鮮は初め釜山知恩寺にて候、七日間、若し要用あらば京城本町開教院にて山崎宛中越され度候、貯金帳は漸次に入て置事にいたす事すべて金は光明主義弘張の資料なれば其つもりにて使はれ度候、只自信敎人信　如來光明主義の爲に一向に勸められんことを希望候　中略

光明主義者は一切たとひ幾千萬人なりとも同じく　如來の子として同胞なれば財物等も誰彼の物なく皆　如來の物として　如來の道を傳ふるに資すべく候故にわづかなれども辨榮の所有不動產等も暫らく名義は辨榮の物につけをくも實は主義の物なれば御身等共に其つもりにて傳導者の爲めに用ふべき事と爲られ度候、其證書は他日確乎としるし置くべし、本より辨榮は此身さへ我有でなく皆　如來に獻げたる物にて候、まして所有物に我有あることなく候、若しかりに辨榮の名義と爲てあるものは暫らく借たるものにて候、御身等辨榮の意を體して　如來の聖意に使ひ奉つる樣に一にすゝめ申候

種々申述度事候へども後便に讓り候

○

田畑山崎辨榮の名義分は全く光明會の所有なるを以て辨榮個人の所有にあらず亦善光寺に附する者にもあらず、辨榮は　如來光明主義の宣傳が生命である、舊式の寺抔にある宗教上實際効能なき坊主や寺抔を養ひ置くこと大に嫌ふ處に候、依て土地山岡所有分は別紙の如くに處分致し度候

此亦總代衆に迄御話置下され度候

證

光明主義首唱者　山崎辨榮所有ノ田畑ハ

全部光明主義宣傳相續者ニ讓與スル

者也之ヲ爲レ證

但シ奥村個人ノ物ニアラス主義宣傳者

大正六年四月廿三日

右善光寺總代衆ニ御披露申候

○

既に吾國民も理性大に開けたり宗教も時期相應して有爲の人々を指導せざるべからず

現在を通じて永遠の光明主義

永遠の現在主義、如來の大光明主義

若し此光明を以て國人を照すにあらざれば日本は闇黑の四趣界に化し去らん

就て今回己が主義主張に便利の道が開けんと欲して今回相模國に無量光寺と云時宗の本山あり（遊行寺に非ず）當寺は昔から淨土宗の僧が住職せし由、今回愚衲に其寺の住職せよとの事、

此に就て外に望ないけれども主義主張に己が理想を實現せんに淨土宗からも束縛をうけず、また藤澤の本山からも關渉を被らぬやうにして新らしき主義主張の爲めに大に宜ろしからんとおもふ、故にそれは其住職にならんとおもふ

就て相談いたし度事も有之候、さればとて敢て至急も要せず候

先は歸京を通知かた〳〵　草々

十五日夜

先日當廟よりの歸へりは定めて雨にて困難なりし事ならんと存じ候、風邪は其後の經過云何哉大分流行感冒猖獗を極め居るゆゑ、御自愛是祈候、

すべて世の中は魔事多し、一ら大なる　如來の常に加護を仰がざれば魔の爲めに侵害せらるゝ恐れあり、魔と云はゞ唯外部より許りでなく人々自己の胸中に潜める煩惱魔は尙一層　如來の加被力を仰がざればならぬことにて候、

十五日十夜には出張いたすべく候、今回は出來うる限り光明主義の宣傳につとむる樣、昔風の十夜會は今日は只弊のみ殘り眞實の益は無之候、

人命の無常なる須臾も停り難し、自行と及び他に光明の宣傳に全力を注ぐべく、それも自分の力の及ばざる處なれば、一心に、如來の加被力を蒙りて如來の聖意我に入來りて初めて　如來に仕ふることをう、また如來の道を世に宣傳することを得

惟みるに百姓は汗と膏とを絞りて我らが日々の食物を造りて與ふ、我らは心血を注ぎて彼等に靈の食を與へざるべからず、我らは日に三度彼らが膏を吸はざる日なし我

らが彼らに供することいかん、南泉師曰く、一日耕さゝれば一日食はざれと唯唐らに坐食して銅活地獄の業を積むこと實に怖れざるべけんや

○

是より光明主義宣傳の目的にて教師出來うる限り造り度候、

當麻も折角入境したるも教師を養成し光明主義の宣傳事業の實行するにあらざれば詮なき事にて候、中略、

新らしき赤子から生れた教會の方がよいと思ふ淨土宗でも時宗でももはや老期に成た宗旨であるから只骸骨が殘て居る樣な物でヅン〳〵發達してゆく見込みはない、基督教は至る處に青少年を教養して居る、天理教は益々發達して行く眞宗と日蓮は兎まれまだ活氣がある、光明主義は今姙娠中でむまく安產が出來るか半產になるかは何れにしても如來に御任せ申して一心不亂につとむる外はない

貴氏も東京に來て基督教の傳道に就て或る點まで研究しては云何

一日〳〵に日はづん〳〵と過行から一瞬間も循々として暮らして居る時でないから身を犧牲的に奮起すべし　種々申述度候へども後便に讓り候

○

日々彼此忙はしくて返書大に延引候

三輪野江村より青年が入寺なされ候由

先づ第一に精神的に　如來光明主義に感染する樣にいたされ度事、譬へば鑛鐵にても鍛練して〳〵ついには名刀と爲候、人間も充分に鍛のない者はゆかぬ、愚衲むかし若き折筑波山に登りて念佛三昧をつとめ諸處にてつとめたるも要する處精神の鍛練を爲るのである、はやく自ら精神的に復活して他に、如來の光明を宣傳すべし、是宗教家の職分である依て發心者にも能く自ら範と成て共に養ふべき樣になされ度候

○

大みをやの光明裏に新年を迎へ

無量壽の聖名を稱えて祝し奉り候

○

世に立て學問の方でも有爲な人物は傳道にも有爲にて自修も熱烈である

ドノ方にも天晴世に働くことのできぬ物にし　仕舞ふのは實に忍びざる處にて候、何の道にても鐵が火に燒かれ鎚にうたれたる千錬萬鍛の人物でなくては實に役に立ぬ世の穀つぶしに過ぎざるものである

命がけの修行せぬものは全く宗教家としてゼロである

○

實に光陰は疾しうか〳〵できぬ

發心者に能く練修させヨ、共に〳〵何事でも能く鍛はねばゆかぬ

目的は疾く光明中の人と成り　大ミオヤの子としてのつとめ、世の同胞を　ミオヤの子たる人とする處にあり、自ら人間の子のみではゆかぬ自ら佛の子と成て世の同胞をみちびくにあり

朝はやくから少なくとも大薫香一本の一心不亂の念佛せねばゆかぬ、愚衲抔が發心する迄には青年時代には山に入て晝夜聲のあらん限り唱へつゞけたのである、力のあらん限りどうしても、只理窟ばかりこねまはしたのではだめである、農業も理窟丈では一粒の米も獲られぬ、自己の人格に結ぶ果も三昧實行にあり、自己に結ぶ種子を世に傳播する處に目的あり

光明讃は斯主義の學說の骨子である此の要解をかいて見せよ

無對光と炎王光丈け解說の要をしるして試みよかし

七月十二日　　名古屋西區千歳町崇德寺にて

○

其後云何候哉、同じくは其村の方に於ても農間を利用して村の人の爲に禮拜儀を教ゆる樣にいたしたならば好き事と存じ候、此程まで當麻にては毎夜男子斗り三十名位集りて盛んに練習いたしをり候

大みおやの御力は一心不亂につとむる處に加はり申候人生只　大みをやの聖旨に仕ふる事のみ眞實有利なことにて候

當麻の學園は大みをやの加被力を仰ぎて世の爲人の爲めに出來るかぎり有爲な青年

を作るべく吉田氏も盡力いたしをり候

大正八年一月二十七日

○

……折々東京に出て相當な人格に接せざれば人格の修養成り難し、人格に觸るのは最も自己の人格を修する最良の器である、また經濟と云ふ事に就ても自から積極的に經營する能力も養はさればならぬ

道譽上人成田利生記に一心斷食して祈念する夜に於て不動尊が出現し大小の二劒を持て、汝此二劒の中何を呑むと仰せられた、道譽曰く、大を呑も小を呑も命を害ふは同一なれば願くは大の劒を呑ませて玉へと云ふ如く人生は向生の一路、同じ生命を堵して爲すことなれば大を以て自任せよ

積極的進取的に奮鬪すべし、退引的消極的はつまらぬ、

○

清淨光裡に新年を迎へ　不斷光中益々向上せられんことを望候

○

……光明主義到る處に行はれ候、時節到來　種々の障害にも遇ひ候、けれどもまだ〳〵他より迫害を被むることも實は身にしむ樣な事の來らざるは全く教が盛んにならぬ故なり

如來さまは其人の一心の深ければ深き丈淺ければ淺き丈けに御力を加へて下さることにて候

人生過一易一たとひ一人なりときも大みをやの慈悲をしらしむるやうにして自己の天分を盡すべきやうに望ましく候

一には自己が　如來より加へらるゝこと

他にわかつこと

二十七日　　信州上諏訪正願寺にて

○

御手紙によれば名古屋の姉上のきみには竟に不歸の客と爲られしとの事、實に世の

無常なる、先に兄上に別れ申しまた姉きみにも再び會ふことのできぬことゝなりし御身の心情の程察しられ候、されば只永遠に在ます獨りの　大みをやをたより申し常恒の大光明裡に慈悲の懷に入りて先たゝれし人の爲めに慈光の加はらんことを祈り、また世の同胞等が獨りの　大みをやの在ますを識らずに現前の花に戯むる蝶のごとく何も覺らずしてうか〳〵と人生を闇の裡に葬りてしまふ人々を思へば形こそ活て居れ神は活埋めの運命に墮落して人々らを一人も多く　ミオヤの御手にお渡し申上るやうにして候へ、是のつとめこそ貴き職分にて候

大正九年一月二十二日　　東京芝公園十四ノ九にて

○

彼親鸞師が越の寒村に專ら大悲の道を叫べども敢て耳を貸す者なし、親鸞泣いて、此里に親の死したる子供はなきか、みのりの風に靡く人なし」と、法藏の五劫思惟と云も實は道を宣傳するにつゐての腐心の物語である、法藏の思惟を用ゐざれば彌陀慈悲の宣傳はできぬ

下總の傳道の手順は村々順行を以て初めに其村に入り其場で禮拜儀を少し教へそれを因緣として次に教へにゆき屢々する內に光明會員を造ることにするが手順としては便利である　昔し辨榮が順行佛を以て村々に順行した經驗がある、光明主義の順行の佛畫を造り　大みをやの教と云ふ標を以て天のおやさまをしらせるとの標の下に專ら弘めて　大みをやの光明に觸れば現身も安穩に未來は淨土に、世に親をしらぬほど不幸なるはなしと云ふ意味にて親を教ゆと云宣傳

至誠心を以て向ふ時は何人も動かす

常に如來を念じて聖意を世に傳ふべくつとめられたし

○

此頃到處に別時三昧大に行はれ光明主義の流通滔々として　如來大慈悲海に歸入する事は實に歡喜此事に候

實に人生若し此光明に接せず闇黑の中に可惜生涯を葬沒するは愍憐の至りに候

何れにしてもボーロの如く熱誠に衆生を醒すべく、鐵を以て鐵を截る人を以て人を

度す精練以て成功すべし

大みをやの恩寵によつて鍛はざれば大なる使命果すこゝゝゝゝ

大正九年十月十日　神戸より廣島車中

○

……老たる病躰世の爲め人の爲めに未だ曾て休んで病を養ふの日なく、數多の子らが衣食に泣く之を見るに忍びず

大正八年七月二十三日　若松市安養寺にて

（下の敬翰は、御母親の病中及び御逝去に當つて御布敎先きより家郷へ送りたまへるもの）

○

欽復、林雨の時節當地に於ては日干にて雨なく農家にては大に困却を感じ居り候

承はれば御老父事御病氣藥石其効なく本月十七日を以て竟に不歸の客と相成らせられ候との事　生者必滅之習ひとはきゝながら哀悼に堪へず候。平素の心掛けまことに上善人なりしうへまた御念佛も申居られ候定めて淨土に往生し候はむことゝ存候。願くは御一同ともに、沒去せられし老父への追福には御念佛を唱へて弔する外に道なきことなれば至誠心に回念せらるゝように御勸め申候　御老母には其後は御すこやかにして御念佛をつとめあられ候との事まことに　如來樣の御蔭ならむと存じ候、また貴氏にも當今はます〳〵御壯健なりとの事幸甚の至りに候。自分も　如來樣の御慈悲によりて夜を日につきて報恩のつとめを爲させいたゞきもらい悅び居候

先は弔辭かた〳〵如斯に候　頓首

明治三十八年一月八日

山崎彦太郎殿

○

梢春和氣の候と相成葬し能く感じらるゝ折

御老母はじめ皆樣御機嫌よく有之候條大慶此事に候、先月歸寺の砌りも御老母に御たづね申度存じ候ひしところ當國へ出張の時日も定まり候爲め意を得ず候。私事無事傳道まかり在り候間御安心被下度候、四月末には歸京いたし候間五月にはまたくり合

せて御伺ひ申候ことに心がけ居候、御老母には世の何かとの仕事はとても盡きるものでは無之候へば氣まゝに出來らるだけにして、而して未來一大事の御念佛は成るべく忘れぬやうに御心がけ候やうに御すゝめ申上候間、願くは御老母に御聞かせ候やうに御たのみ申候

尙申述度事は多く候へども後便に讓り候　匆々

三月十一日

○

大みをやの光明の裡に目出度歲をともに申納候

時節柄寒氣も益々相增し候折皆樣愈々御機嫌に有之候條大慶此事に候、中略、御老母は此寒さ中、隨分御老體の事なれば御大切になされ候やう　而して先づ世のよろづの事は兎にも角にも後生の一大事御念佛をねてもさめても稱えなされ候こと是も大切にて候、何れ其近くに廻はり候時に伺ひ申度候　中略

一月七日

○

漸く寒氣に成候折其後

御老母之容體はいかゞ候哉、折節は夢になと見是非歸省して此世の名殘りにもとは深く存じ候へども四月より七月廿日迄筑後善導寺に引籠り廿日より筑前博多を始め各地にて傳道の計畫も已にきまり候へば途中にて中止することも出來ず、一には佛畫を有緣の地に留め將來數百年の後に大に佛敎を留むる因緣にも相成申すべく現在には有緣の善男善女に法を宣傳し候事に、夫に就ては老母の悲恩をおもへば一日もはやく歸へりて老ひたる母の心を慰安したく候へども一方には佛と法との爲めに一時間をも生命のある限りは竭し度く、歸へりて母の許に慰安を爲さゞるは孝養に背むくことなれどもそれでも此我身も父母の遺體なれば此身を以て九州の地に於て佛と法との爲めに千萬人に對しまた數百年の後に至る迄の事業を成し置けはたとひ萬一老母が此世を去りしとても後生菩提の爲めに其資に宛つべく候へば、父母の遺體なる我身を以て日々に世佛法に就ての事業は即ち是父母がなさると同じ功德なれば自身ながらも日本中い

か成る知らぬ土地に到りても大なる尊敬をうけて深く歡迎さるゝは全く本は　大ミオヤの御蔭とまた一は父母より此身をうけし故なりと深く感謝して少しも自分の力とはおもはず候、殊に我母は極めて善良の性質なればそれで自分がよくなくとも世の人々がよくうけて用ひて呉れることゝ存じ候て父母にも大に内心に感謝することに候

父や母のおかげにて、大ミオヤの如來樣から私に特別の御恩寵を以て佛法の爲めに他に超へてよくつかへさして下さることに成りしものゝと深く喜び候　日々に拜寫す處の佛法は寺院やまたは大家にて特別の貴重物として世に珍重せらるゝも一に私の力ではなく、如來樣の御光りと兩親の御かげと存じ候

筑前筑後豐前豐後と肥後の一部とは已に廻り候、日向大隅薩摩と肥前が來年三月頃迄にまわりて歸國のつもりにて候、右の次第なれば御承知被下度候

大正元年十二月五日　　福岡縣善導寺にて

山崎彦太郎殿

○

滄海よりも愛恩の深き吾悲母は既に本月十二日午後十時に歸へらぬ旅の西の彼岸に神を遷し玉ふとの訃音に接しぬ、實に己れ幼き時より慈愛の深き惠みによりて育くまれしまことに慈愛の情おもへば悲歎堪へがたきにぞ、此春つかた訪ねし折に慈悲の面かげに接したるのが此世の名殘りとなりてまた再び逢ふことの能はざるに至りしはかなしみのきはみにて候、曾て折角の再度の音信にあづかりながら歸省をせぬことはまことに恩に背くに似たりと雖も先んころ曾て申述べたるごとくに吾父母に遺與せられたる此身を以て佛の道を傳ふる時は是吾父母の恩に報ゐんが爲めまた西の筑後路に於て數多の善男善女に歸依せられて道に入る人々の爲めにもまた一には、如來てふ大みをやとまた此身を別けて賜はりし吾父母あればなり、しかれば俗情より云はゞ恩に背くなれども佛法の方より見ればまた報恩の意なきにあらず、吾亡き母の菩提の爲め尙ほ一層傳道に盡瘁して追福に荐めんと欲す、今は已に亡き數に入る吾母の生前の事を偲ぶれば感じてあまりあり吾母ほど能く忍び能くつとめたる人は世にすくなかるべしとおもはれ候實に良き生涯を爲したる人なりとおもふ、殊に吾は吾亡き母が平常深く

後生を欣び稱名念佛しまた阿彌陀經をよみ光明歎德章を誦して信念を厚ふせしが自分に取りては實に感佩に耐へず候、いかにとなれば愚衲は廣く世に　如來光明の眞理を專ら弘傳するに自己の生母に勸めざることはいかに遺憾なるぞ、然るに吾亡母が至誠心に經をよみ念佛して信仰し呉れしは辱く存じ候

亡き母に手向けて

しはしまたわかるゝものとやかてゆく
西のみやこにあふ日をぞまつ

海原の水よりもなほ深かりし
母の惠みをいかにむくはむ

法の爲め身はつくしかた亡き母の
送りにもれし罪をゆるせよ

亡き母に手向まつらむ道のため
身をつくし路につくす業もて

日々に數多の人々に傳ふる法廣く現世に行はれまた佛書は數百年にわたりて數多の人に結緣せん、此の事を爲すに至りしも全く吾父母の遺體に依る、何んぞ報恩の情なからむ

時ます〳〵寒き折願くは御自愛あらんことを

大正元年十二月廿三日　　福岡縣弘善寺にて

山崎彦太郎殿

皆樣へ宜敷御傳聲被下度候

○

（御殿父は明治三十八年一月八日の御逝去にて世壽七十七歲　常行院隨響大蓮生緣居士）
（御悲母は大正元年十二月十二日の御逝去にて　世壽八十歲　專修院妙響常念憶想大師）

以上全部五香善光寺師及御生家辨誠に賜はりし御慈訓を同師が拔萃謹寫し且つ編輯し奉りしものに候　――係――

念珠の說あかし

此念珠は宗敎の眞理なる、ナムアミダ佛の要義を表示したのである。ナムは己が一心を献げて歸命信頼すること、アミダ佛は絶對的偉大なる力を以て救ひ玉ふ如來である。上の三顆は如來の三身、次の小なる兩方のは法身の一切知と一切能とにて、次の兩方の六顆づゝは十二の光明次の二の小顆は報佛の慈悲と智慧とにて、下の三顆は衆生南無の三心信と愛と慾との意である。斯一連に如來の聖心と衆生の心とが合一し救てはるる意義を表はしたのである。

如來三身。アミダ佛は宇宙に最尊第一に在まし本一體なれども法身、報身、應身の三身に分れて在ます。

法身は天地萬有の本體にて萬法を統制し萬物を產出し宇宙全體を通じて其體とす。故に宇宙は活る如來である。衆生は法身から分れたる分子である。故に佛性と云ふ佛に成り得る卵子である。然れども其まゝ自然に佛に成ることはできぬ、衆生佛性の卵子を慈悲と智慧とにてあたゝめ孵化し佛として下さるのが報身佛である。報身佛は宇宙最高の光明永しへに輝ける常樂世界に在して麗はしき相好を具へ光明普く十方世界を照して歸命信頼衆生を攝め取て彌陀同體の身として下さる如來である。應身佛は報佛の分身にて此世に出て人身を以て衆生を常樂に導びき玉ふ敎主釋尊である。敎化畢

て八十歳にて本の光明界に還り玉ふ。斯三身に分れたるも本一體である。一切知一切能は法身佛が天地萬物を開發するに秩序を整へ生活活動せしむる自然の働である。

十二光。如來の靈德無量なれども斯十二の中に悉く攝して遺すことなし無量無邊無礙の光は宇宙に充滿する體相用の三大である。

無量光。宇宙の本體諸佛の本地萬物は斯本體に本づきて存在す此本體を悟らざるを衆生と云ふ斯如來心を體得するを諸佛と名づく。

無邊光　相大如來藏に一切萬法無邊の性德を具して缺る事なく而して斯光にて萬法を照す此を證るを諸佛一切智と云ふ。

無礙光　如來の一大靈力である。一方には天地萬物の造化の大用にて一面には衆生を攝取の爲に應報の佛身土を現じ衆生を度したまふ。斯光が一切諸佛菩薩諸善萬行の一大原動力である。斯三大光が宇宙に遍く亙りて常に大活動を爲し天地萬物を開展しまた一切衆生を佛界に攝め取て成佛せしむるのである。

無對光　本覺の大みをやの許を迷ひ出し眞に背き妄に隨ひ光を失ひ闇にある衆生を憐れみ絶對威力を以て衆生を攝めてミダ同體のさとりを得せしむ。如來に同化する時は彼と我との相待でなく絶對的に同體不二の身と爲して下さるから無對と云ふ。

炎王光　喩ば大火炎を以て諸の不淨物を焚盡すが如く如來大威神の光は衆生の煩惱と業と苦とを焚盡して諸佛の功德を與へ玉ふ故に炎王光と云ふ。

清淨光の下四光は衆生の心を靈化する妙用である。

清淨光　汚れの心を清めて美化する光。私共の六根は外界の色聲香味觸の六塵の爲に染汚され六慾の爲に卑劣に流れ肉慾溺れついに惡き習慣は其性質までも汚すことになる。然るに六塵の汚を淨めて日に新にして六根清淨に快よく潔よくして下さるは斯光である。

歡喜光　苦を拔き樂を與ふ。人生苦惱多し生存競爭の激しき世に種々の苦悶は逼來る中に於ても春風駘蕩ときはの春に心の花開き身は此土にありて神は淨土に逍遙法喜禪悅の樂みは斯光の賜である。

智慧光　迷を轉じて悟を開かしむ。無明癡闇の凡夫一寸先が闇である然るにさかし

き智は還て己を欺きて斷常二見の坑に陷り易い。喩ば日光出れば萬境一時に照す如く佛日の光明の下に眞理にかなふ智慧も生じて一切の佛法をさとることをうるは斯光である。

不斷光　私共の惡き意を轉じて善き心に靈化して道德的の行爲をなんしむるの光である。人間一日八億の念が私慾の惡意より衝き出す念は悉く惡道に向て盲動するのである。若し斯光にて心意一轉して如來の聖意より出る心として身と口意に於て作す業は皆自ら佛心と相應し佛行となりて日々に光明中の働きをなさせて下さる。

難思光の下三光は光明生活の三階位である。

難思光　喚起の位、初心の輩は如來の光明とは何なる狀態なるかは未だ經驗せざることなれば量り知ることができぬ故に難思と云ふ。若し光明の眞理を聞て專ら稱名しまたは冥想觀念讃美祈禱等を以て信念を養ふ時は早晩機熟して微かに靈光に接して心の曙となるこれを喚起の位とす。

無稱光　開發の位、信念稍進み內に薰發の因あり如來慈愛の光に催されて歡喜の一念に如來心と融合し信心花開きて光明を實感す其妙味は自ら證知するも他に詮はすことは能はぬ故に無稱と云ふ。

超日月光　體現の位、已に光明中の人となりてからは日々三業に爲すことは悉く光明を身の行爲に現はす故に體現とす如來は心靈界の太陽なれば超日月光と云ふ靈光の下に生活々動することである。

智慧と慈悲とは報身佛か念佛衆生を攝め取玉ふ左右の御手である。

衆生　南無の三心、如來の光明を得んと欲せば必らず三心を具ふべし。則ち十八願の意にて至心、信樂、欲生の心である。至心は眞實心にて如來の靈心と合する衆生心の形式にて信愛慾は其內容である。

信は如來の不思議の靈力を信じて全心を献げて信賴するので三位あり仰信は一心一向に不思議の力を信じて疑慮なき者は自ら佛心と相應じて救はる。解信は如來大願の意義を領解して信を立つ。證信は實習の功果として光明を實驗して信を得。何れにしても實に信じて疑なきを要す。

樂は愛樂　感情の奥に佛心と融合し全く如來を我物となるは愛である。如來を愛するに三位あり。一に親の如くに愛慕し二に異性に對する戀愛の如に一心に佛を戀愛し三に如來を大なる眞の我として愛す之を愛樂とす。

慾望　宗教心の慾望、眞善美の極みなる靈國に生じ佛と成らんとの望みである。此に三位あり、一願作佛心、佛の子と爲らんとの慾望、二に正しく更生りて佛子と成し時と、三に聖子の職たる衆生を度せんとの望である。此の三心は知と情と意とに於て如來心と合すべき衆生の心である。

念珠の表示を略して明しぬ。願くは諸の賢者と共に大みをやの光明によりて今後世を通じて安寧を得んことを祈る。　佛陀禪那欽しみ言す。

大正十二年七月二十五日印刷同二十八日發行
誌代年六冊壹圓貳拾錢　年十二冊貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成　東京京橋區本八丁堀一丁目十五番地
印刷人　秋場熊太郎　東京小石川區水道端二丁目四十四番地
發行所　ミオヤのひかり社　振替東京四九三四八番